大妻女子大学博物館所蔵の手芸裁縫作品調査報告（１）

The needlework and handicrafts collection of Otsuma Women's University Museum, Part 1

中川 麻子[1]
[1]大妻女子大学家政学部被服学科

Asako Nakagawa[1]
[1]Department of Clothing and Textiles, Faculty of Home Economics, Otsuma Women's University
12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan 102-8357

キーワード：手芸，裁縫，女子教育，博物館資料，大妻コタカ
Key words：Handicrafts, Sewing, Girls' education, Museum documentation, Kotaka Otsuma

抄録

明治時代初期から開始された日本の初期女子教育では，手芸と裁縫に関する教育が重要視された．大妻女子大学は，大妻コタカによって明治41年に手芸と裁縫を教授する私塾として始まり，現在までその伝統が受け継がれてきた．本稿では，大妻における手芸裁縫教育の詳細を明らかにすることを目的として，大妻女子大学博物館所蔵の手芸裁縫作品のうち，筆者が平成26年11月～12月に調査した267点について報告した．調査の結果，所蔵作品は「手芸作品」，「裁縫雛形」，「その他」の3項目に分けられ，さらに手芸作品は12の手芸技法によって分類できた．

大妻コタカの著作類と照合したところ，昭和2～5年頃の出版物掲載の作品と類似するものが多かった．作品形式や技法などから，今回の調査対象である手芸裁縫作品は，大正時代末期から昭和10年ごろ制作されたものであることが明らかとなった．また調査した作品の大半がレース類であり，テーブルクロスなどの実用的な作品が多いこと，課題作品の内容から，大妻では合理的に学べるようカリキュラムが工夫されていたことがわかった．本研究から，大妻女子大学所蔵の手芸裁縫作品は，大正時代末期から昭和10年頃までの大妻の手芸教育の内容を伝える重要な資料であることが明らかとなった．

1.　はじめに

明治５年の学制発布を機に始まった女子教育では，手芸と裁縫に関する教育が学科の中心に置かれた．これは江戸時代から各地で針仕事を教える女寺子屋や「針小屋」があり，当時の女子にとって手芸と裁縫の教育が慣習的に行われていたこと，また学校教育に実務的な科目を取り入れることで，女子の就学率を上げるための策でもあった．

一方で，都市部では明治時代初頭からミッションスクールが開校し，外国人宣教師の妻などによって洋風手芸が良家の子女に教授されていた．

明治 10 年代には女子の中等教育が開始され，明治 14 年の和洋裁縫伝習所（現東京家政大学），明治 19 年の共立女子職業学校（現共立女子大学）など相次いで開校した[1]．

大妻女子大学の前身となる大妻技芸学校は，大妻コタカが裁縫と手芸を教授する私塾として明治 41 年に始まった．大正 5 年には東京府下各女学校製作展覧会に手芸作品を出品したことをきっかけに，私立大妻技芸伝習所が設立された．その後，大正 8 年の私立大妻技芸学校が開校されて以来，裁縫と手芸に関する科目は変化・増減しながらも，大妻女子大学へ受け継がれている．

現在，大妻女大学博物館には，学生および教員が制作したとされる手芸と裁縫の作品が多数所蔵されている．作品形式等から，大正時代末期から昭和時代前半のものが多いと見られている．作品には仮所蔵番号がつけられリスト化されていたが，制作者および制作年代が不明の資料が多く，また実際とは異なる技法名がつけられた作品もあった．

大妻技芸学校創立期から大学設立に至るまでの手芸と裁縫に関する教育（以下，手芸裁縫教育と呼ぶ）については，学校年史，教則本，同窓誌などに記録されているが断片的な記述が多い[2]．これに対し，大

妻女子大学博物館に所蔵されている手芸と裁縫に関する作品（以下，手芸裁縫作品と呼ぶ）は，当時のカリキュラム，作品，教授内容を具体的に伝えるものであり，大妻技芸学校から大妻女子大学に至る大妻の手芸裁縫教育の変遷を捉えることができる資料であるといえる．

筆者は，明治時代以降の女子教育における手芸裁縫教育の社会的影響を捉えるため，平成 26 年 4 月から継続して大妻女子大学，共立女子大学，東京家政大学，女子美術大学の付属博物館所蔵の手芸裁縫作品の調査を行っている．このうち本稿では，大妻女子大学博物館の所蔵作品の調査について報告する．さらに調査した作品の整理・分類および年代確定を行い，所蔵作品の資料的価値を確認することを目的としている．

表 1. 大妻女子大学博物館所蔵　手芸裁縫作品内訳（平成 26 年 12 月調査分）

	技法名称	作品形式	数量	
手芸	マクラメ編	テーブルセンター（花瓶敷）	20	62
		ピンクッション	2	
		袋物	2	
		ランプシェード	8	
		紐	2	
		見本	28	
	かぎ針	キャミソール	5	57
		見本・モチーフ	9	
		袋物	2	
		小型四角形レース	6	
		飾り布	12	
		テーブルクロス	23	
	バテンレース	飾り布（100cm以下）	22	30
		テーブルクロス（100cm以上）	7	
		ピアノクロス	1	
	ネットレース	飾り布（100cm以下）	17	18
		下絵	1	
	袋物	守り袋	9	18
		袋物	9	
	タッティングレース	ハンカチ	1	17
		見本・モチーフ	4	
		袋物	2	
		飾り布	10	
	刺繍	刺繍見本	4	8
		テーブルセンター	1	
		スモッキング刺繍	1	
		モチーフ刺繍	1	
		半襟	1	
	押絵	色紙	5	5
	ビーズ	ビーズ	4	4
	棒針編	見本	2	2
	ハーダンガー刺繍	テーブルセンター	3	3
	ルーピング	マット	2	2
裁縫	雛形	衣服の雛形	33	33
その他		染め見本、半纏、型紙など	8	8
		合計	267	267

2.　方法

筆者は平成 26 年 11 月～12 月に，大妻女子大学博物館所蔵の手芸裁縫作品 267 点の計測，撮影，技法分類を行った[3].

資料は，手芸技法によって分類し整理した．分類に用いた技法名については，時代によって変化するため，現在の日本において使用されている技法名を優先的に使用した．

整理した整理作品は，大妻コタカによる書籍・雑誌記事を参照して制作年代と技法の確定を行った．書籍と雑誌記事については，大妻女子大学ホームページ上で公開されている書籍と，国立国会図書，国立民族学博物館図書館，筆者所蔵の書籍・雑誌 20 冊を用いた．合わせて，明治時代後期から昭和時代に出版された手芸裁縫関連の書籍類を参考にした．

3.　結果

3-1.　所蔵作品の技法的分類

作品は「手芸作品」，「裁縫雛形」，「その他」の 3 項目に分けられ，手芸作品については 12 の技法に分けることができた（表 1）．内訳は，手芸作品 226 点（マクラメ編 62 点，かぎ針編 57 点，バテンレース 30 点，ネットレース 18 点，袋物 18 点，タッティングレース 17 点，刺繍作品 8 点，押絵 5 点，ビーズ 4 点，棒針編 2 点，ドロンワーク 3 点，マット 2 点），裁縫雛形 33 点，その他（絞り染見本，半纏等）8 点であった．

以下，技法に分けて説明をする．

3-2.　マクラメ編

マクラメ編は所蔵作品の中で，最も数が多く 62 点あった．この内，マクラメ編の部分編を色紙に縫い付けた見本は 28 点があった．いずれも数種類の色糸を組み合わせて凝った技法で編まれていた（図 1）．また「花瓶敷き」または「テーブルセンター」と台紙に記された黒いラシャ紙に，直径 20～30cm の円形のマクラメ編を縫い付けた作品が 20 点あった．紙には制作した学生の学科名と氏名が明記されており，提出用または展示用の作品だったと考えられる（図 2）．この他にランプシェードが 8 点あった（図 3）．

なお，所蔵作品には「マクラメレース」と明記さ

図 1．マクラメ編見本

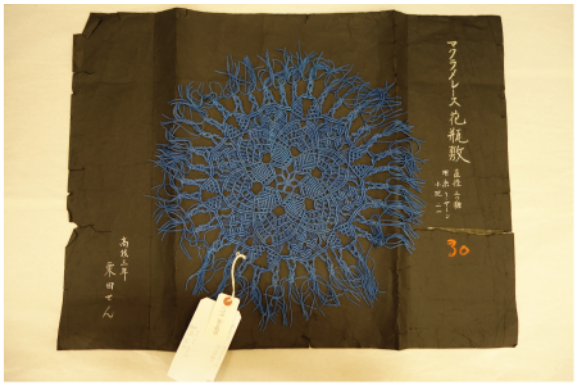

図 2．マクラメ編

図 3．マクラメ編
ランプシェード

図 4．かぎ針編　飾り布

図 5．かぎ針編　キャミソール

図 6．バテンレース　飾り布

図 7．「在庫」のラベル

図 8．ネットレース

図 9．袋物

図 10．袋物　金魚型守袋

図 11．タッティングレース　見本

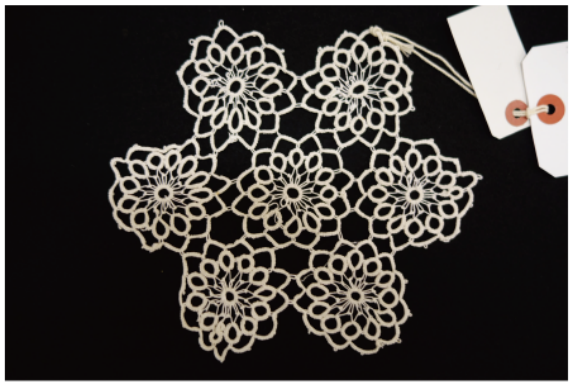

図 12．タッティングレース　飾り布

図 13．刺繍見本

図 14．押絵

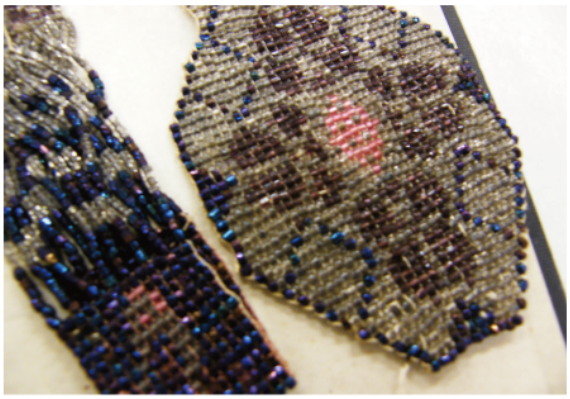

図 15．ビーズ　ベルト

図 16．棒針編

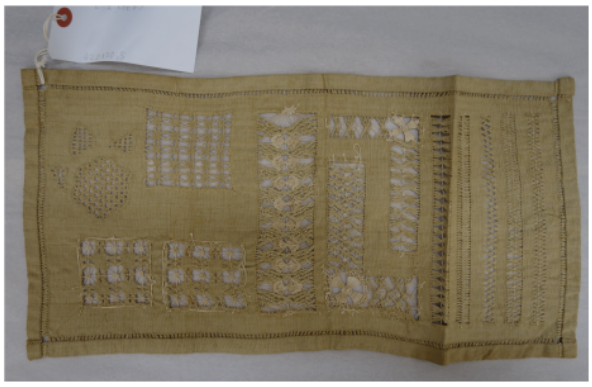

図 17．ドロンワーク刺繍

図 18．ルーピング　玄関マット

図 19．裁縫雛形　袴

図 20．その他　絞染見本

図 21．その他　図案集

れた作品もあるが，レース編以外の作品も多くあったため，本稿では「マクラメ編」と表記した．

3-3.　かぎ針編

かぎ針編は 57 点あり，所蔵作品の中でも数が多い．いずれも細手のレース糸で編まれた作品であった．テーブルクロスは 23 点，小型の飾り布 12 点，小型で図案が透かし編みされた四角形レース 6 点，編見本・モチーフ編 9 点，巾着型などの袋物 2 点があった．小型の飾り布は台紙に糸留めされていた（図 4）．キャミソールは，白の木綿地の婦人用キャミソールの縁飾りにかぎ針レースを用いたもので 5 点あった（図 5）．

3-4.　バテンレース

バテンレースとは，市販のブロードを縫い合わせて模様を作るレース技法である．小型の飾り布 22 点，一辺が 100cm 以上のテーブルクロス 7 点，ピアノクロス 1 点，以上 33 点あった．

通常は約 1cm 巾のブロードを使うが，巾が半分程度の細いブロードを縫い合わせた華麗な雰囲気の作品があった（図 6）．また「在庫」という札がついている作品があり，バザーや学外向けの展示会の販売用に制作された可能性がある（図 7）．

3-5.　ネットレース

ネットレースとは，ネット地にレース模様を刺繍していく技法である．薄手の方眼状に編まれたネット地に，太めの刺繍糸で模様を刺して図案を表現する．一辺 100cm 以下の飾り布 17 点と，現物大の下絵 1 点を確認できた（図 8）．下絵の上にネット地を置いて，図案を見ながら刺繍したと考えられる．作品はハンカチのような大きさで，台紙に縫い付けられていた．

3-6.　袋物

袋物とは，物を運搬するために入れる袋類の総称である．金銭，化粧品，煙草などの小物類を入れる小型バッグ類や，子供用の守り袋も含まれる．

大妻コタカの著作にも袋物は多く登場する．所蔵作品のうち，小物用の袋物は 9 点あり，紙入れ（財布），ハンドバッグなどがあった．内側には鏡が付属していることが多いため，女性用だったと考えられる．作品には「標本」とペンで書かれたものがあり，授業で学生に見せる見本作品であったと考えられる（図 9）．

守り袋は，金魚型，人形型，巾着型など様々な形状をした作品 8 点が所蔵されていた（図 10）．いず

表 2. 本調査に使用した大妻コタカ著作・執筆文章

	筆者	書名	出版社	出版年	備考
1	大妻一恵	家事文庫　手藝	家事文庫刊行會	大正5年	
2	大妻コタカ	和洋裁縫講義	大興社	昭和2年	
3	大妻コタカ	裁縫と手芸	大興社	昭和2年	
4	京田武男編	ラヂオ講演　婦人子供服の裁縫と手芸	北隆館	昭和3年	大妻コタカ執筆
5	婦人世界	最新家庭手芸全集	実業之日本社	昭和4年	大妻コタカ執筆
6	大妻コタカ	模範裁縫教科書(1)	三省堂	昭和2年	
7	大妻コタカ	模範裁縫教科書(2)	三省堂	昭和2年	
8	大妻コタカ	模範裁縫教科書(3)	三省堂	昭和2年	
9	大妻コタカ	模範裁縫教科書(4)	三省堂	昭和2年	
10	大妻コタカ	模範裁縫教科書(5)	三省堂	昭和2年	
11	大妻コタカ	おさいくもの新書	金星堂	昭和2年	
12	大妻コタカ	日常作法折紙と水引	文光社	昭和3年	
13	大妻コタカ	図入説明　新型編物と手芸	大興社	昭和3年	
14	大妻コタカ	初歩の手芸	忠誠堂	昭和4年	
15	大妻コタカ	婦人服子供服　洋裁の初歩より	研文書院	昭和9年	
16	少女倶楽部	少女編物手芸	講談社	昭和10年	大妻コタカ執筆
17	大妻コタカ	母の手芸	婦女界社	昭和14年	
18	大妻コタカ	現代手芸全書	研文書院	昭和15年	
19	大妻コタカ	毛糸編物全集	女子教育社	昭和22年	
20	大妻コタカ	袋物講義	不明	不明	

れも縮緬の小布で作られており，手のひらに乗るほどの大きさだった．子供の背守り用に作られたものだと考えられる．

3-7.　タッティングレース

タッティングレースは，日本では大正時代末期から昭和時代にかけて流行したレース編の一種で，小さなシャトルと呼ばれる糸巻きを複数用いて編み上げていく技法である．

調査したタッティングレースは，いずれも細手の糸を用いた緻密に編み上げられた作品であり，高度な作品ばかりであった．飾り布 10 点，見本・モチーフ 4 点，袋物 2 点，ハンカチ 1 点の計 17 点を確認した．見本は様々な編み方を複数の色糸で編んだものがあり，豊富なバリエーションの技法を学習していたようである（図 11）．飾り布は繊細なモチーフをつなげた華やかな作品が多かった（図 12）．

3-8.　刺繍作品

刺繍作品は，刺繍見本 4 点，テーブルセンター2 点，スモッキング刺繍 1 点，モチーフ刺繍 1 点，半襟 1 点，計 9 点を調査した．

刺繍見本とは，学生自身が練習を兼ねて 1 枚の布に数種類の技法を刺繍するもので，その後は自分用の見本として使用する．他大学の刺繍見本は，日本刺繍と欧風刺繍それぞれ分けたものが多いが，大妻女子大学博物館に所蔵されている見本は，日本刺繍と欧風刺繍を組み合わせたもので，合理的に学習できるよう工夫されていた．（図 12）．

3-9.　押絵

押絵とは絵に綿を薄く張り，布地で包んで作った部品を組み合わせて図案を表現する手芸で，江戸時代から行われていた技法である．人物や風景の押絵を色紙に貼り付けた作品 5 点を確認した（図 13）．書き損じの薄紙を裏打ちに使用した作品もあり，授業においても大妻コタカの推奨した廃物利用の精神が貫かれていたことが分かる．

3-10.　ビーズ

ビーズは専用の織り機を用いて織り上げたと見られる作品が 4 点あった．台紙に縫い付けられており，展示用または提出用の学生作品と見られている．繊細な作業によって細かな模様を織り上げた巾着型のバッグと細長いベルトは，アールデコ風のデザインで昭和時代初期ごろの作風と見られる（図 15）．

3-11.　棒針編

台紙に縫い付けられた縄編みの見本 1 点と，鳥と

図 22. 袋物　人形型守り袋

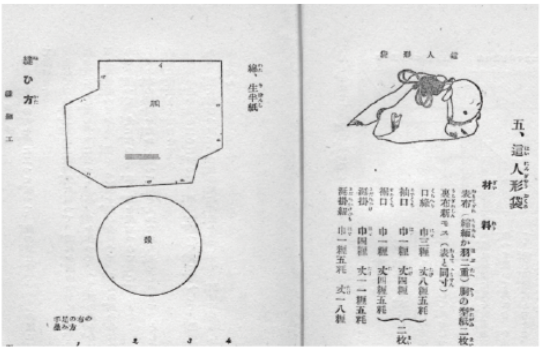

図 23.「這人形袋」『初歩の手芸』昭和 5 年

図 24. マクラメ編ランプシェード、博物館所蔵作品

図 25.「マクラメ編み電灯カバー」『初歩の手芸』昭和 5 年

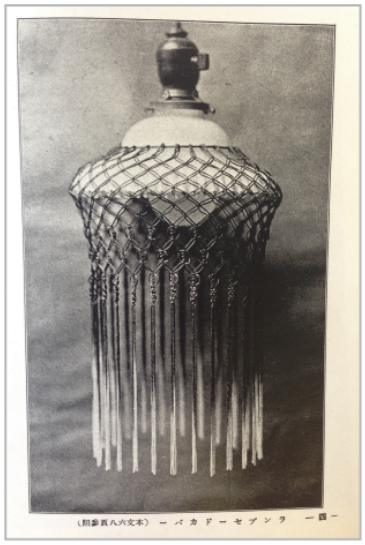

図 26.「ランプシェード」『マクラメ手藝と其の應用』昭和 2 年

動物，家と木の模様を編んだモチーフ編み 1 点を確認した．台紙の端に綴じ穴が空いていることから，もともとはアルバムのような状態で綴じられていた資料だったと見られる（図 16）．

3-12.　ドロンワーク

ドロンワークは刺繍レースの一種で，布地の糸を部分的に抜き，束ねることで透け部分を作り周囲をかがって模様をつくる技法である．テーブルクロスとみられる長方形の作品が 2 点あり，1 つは白地に白糸の作品，もう 1 つは幾何学的な花模様の刺繍とハーダンガーを組み合わせた作品であった（図 17）．「標本」とペン書きされており，学生へ見せる見本として使用されていた．

3-13.　マット

ルーピングと呼ばれる太めの毛糸で輪（ループ）を作る技法で作られたマット 2 点があった．1 つは裏に「昭和 33 年度高校手芸部共同製作品」と記されていることから，昭和 23 年に創立された大妻高等学校の学生作品であることが明らかである．もう 1 点には記載がないが，毛糸の種類や技法が似ていることから，ほぼ同時期のものだと見られる（図 18）．

3-14.　裁縫雛形

裁縫雛形とは，衣類や小間物などを実際よりも縮小して縫った裁縫見本である．布地と制作時間を節約するために，明治時代後期から日本の裁縫教育で取り入れられたものである．調査した雛形 33 点には，和服と洋服の両方が含まれ，袴などの衣類の他に，着物の袖，シャツの袖，ジャケット前身頃など，部分縫いも多数含まれていた（図 19）．卒業生からの寄贈品が多い．

3-15.　その他（絞り染見本，半纏等）

「その他」として，絞り染の見本，大妻の校章が白く染め抜かれた紺色半纏，足袋の型紙，図案集，「玉縁ポケット」と手書きされた縫見本，染物の写真，布地，作品を梱包した包み紙，以上各 1 点，計 8 点を確認した（図 20，21）．

4.　所蔵作品制作年代と大妻コタカ著作掲載作品

所蔵作品の制作年代を明らかにするため，大妻コタカの著作に掲載された手芸作品を参照した．使用した著作は，表 2 の通りである．

このうち昭和 5 年出版『初歩の手芸』には，今回調査した袋物，守り袋，マクラメ編で近似する作品を見つけることができた．

図 22 は縮緬細工できた守り袋である．赤ん坊を象っており，背中に細帯が蝶々結びされている．これに相当すると思われるのが「這人形袋」である（図 23）[3]．技法や背中の細帯がとてもよく似ている．

マクラメ編のランプシェードについても，『初歩の手芸』に，所蔵作品と同じデザインの図版が掲載されていた（図 24，25）．書籍掲載の図版には「マクラメ編み電灯カバー」と説明がついている．このようなマクラメ編のランプシェードは，大正時代末期から昭和時代初期に流行したもので，当時のマクラメ編の教則本にも使用例が掲載されていた（図 26）．これらは作品形式と技法から，ほぼ同時期のものとみて良いだろう．

またこの他にも，今回調査した袋物，タッティングレース，かぎ針の飾り布に似たデザインと技法の図版を，昭和 2～5 年に出版された書籍・雑誌に見つけることができた．

当時，大妻コタカは手芸分野で多くの書籍を執筆し，ラジオ講座や外部の講習会を開くなど，社会との関わりが強かった．このため学校で行っていた講義内容を書籍類に掲載したと考えられる．今回調査した袋物，マクラメ編のランプシェード，かぎ針の飾り布は，大正時代末期から昭和 10 年頃までの作品された作品と見られる．

5.　結果：大妻女子大学博物館所蔵作品の特徴

以上の調査から，以下の 5 点が明らかとなった．

① 267 点の手芸裁縫作品は，大正時代末期から昭和 10 年ごろ制作されたものが多かった．

② 特に昭和 2～5 年頃に出版された大妻コタカの著作に掲載された作品と，技法，デザイン，作品形式が類似する作品があった．

③ 267 点の手芸裁縫作品のうち，マクラメ編，かぎ針編，バテンレース，ネットレース，タッティングレースなどのレース類が 183 点と大半を占めていた．

④ テーブルクロス，花瓶敷き，飾り布といった家庭で使用する実用的な作品が多い．

⑤ 裁縫雛形や刺繍見本のように，短期間で合理的に制作できる作品が多い．

大妻技芸学校が開校した大正時代後期は，手芸が一般的に広まった時期であり，職業婦人から趣味として習いたい主婦まで，さまざまなレベルの学生が学科を受講していた．そのため，大妻技芸学校では本科，研究科の他に，即成科や土日の講習科を設けていた．

今回，調査した手芸裁縫作品は，短期間に高い技術を身につけられるように工夫された大妻独自のカリキュラムで制作されたものと見られ，当時の手芸裁縫教育の内容を伝える資料であるといえる．

今後は，引き続き未調査の約 300 点の所蔵作品についての調査，詳細なカリキュラムとの照合，昭和時代の卒業生へのインタビューを行っていく予定である．

注

〔1〕 中川麻子・田中淑江．　明治時代の女子教育における刺繍について．　筑波学院大学紀要．平成 25 年．　第 8 集．　51-55 頁．

〔2〕 大妻技芸学校の裁縫と手芸の科目については，木野内清子他．　大妻学院の被服教育（第 1 報）－裁縫と手芸の細目について－．　大妻女子大学家政学部紀要．　平成元年．　第 25 号．77-97 頁において，大正 5 年の私立大妻技芸伝習所から昭和 24 年の大妻女子大学に至るまでの学科名を掲出されている．作品解説は主に裁縫科目を中心としており，手芸科目については平成元年当時のカリキュラム説明であり，大正～昭和時代前期についての記述はにない．

〔3〕 なお，博物館には本稿で取り上げた資料以外にも手芸裁縫作品を所蔵しており，平成 27 年 12 月現在も調査研究が進められている．

〔4〕 大妻コタカ著『初歩の手芸』昭和 5 年出版，40-41 頁．

〔5〕 大妻コタカ著『初歩の手芸』昭和 5 年出版，113-115 頁．

謝辞

本研究は，平成 26 年度大妻女子大学戦略的個人研究費（S2630）の助成を受けて行いました．

参考文献

小出春江「マクラメ手藝と其の應用」盛林堂，昭和 2 年

少女倶楽部「最新少女手芸」講談社，昭和 5 年　　出口競「東京遊学学校案内」大明堂，大正 11 年

Abstract

Women's education began in Japan in the early Meiji Period (1868–1912), and during its early years, training in needlework and handicraft production was considered important. Otsuma Women's University was established by Kotaka Otsuma in 1908 as a private school for handicrafts and sewing, a tradition that has been passed down to the present day. This paper discusses 267 items belonging to the handicrafts and needlework collection at Otsuma Women's University Museum that were studied in November to December 2014 with the aim of furthering understanding of handicraft and sewing education at the school. The items were divided into three categories by type ("handicrafts," "needlework samples," and "other") and then further divided into twelve categories based on technique. A review of publications by Kotaka Otsuma revealed that many of the items resembled those included in publications dating from 1927–30. The type, production techniques, and other aspects of the items indicated that they were produced between the end of the Taisho Period (1912–26) and 1935. The majority of the items were lace, and the predominance of practical items such as tablecloths, together with the content of the practice work, suggests that the university's curriculum was designed with the practical needs of students in mind. This study demonstrates the importance of the handicraft and needlework collection at Otsuma Women's University Museum for gaining insight into the nature of handicraft education at the university from the late Taisho Period through 1935.

（受付日：2015 年 12 月 8 日，受理日：2015 年 12 月 16 日）

中川　麻子（なかがわ　あさこ）
現職：大妻女子大学家政学部被服学科　准教授

共立女子大学大学院博士課程修了．筑波大学大学院博士課程単位取得満期退学．
専門は服飾文化史，デザイン史，グラフィックデザイン．明治時代およびヴィクトリア時代の染織分野に関する研究，明治時代以降の手芸分野に関する研究，公共空間およびアメニティスペースにおけるデザインに関する研究を行っている．
主な著書：『はじめて学ぶイギリスの歴史と文化』「歴史の扉 7　ファッションの時代」（共著，ミネルヴァ書房，『公共駐車場におけるサインデザイン（計画編）わかりやすく親しみやすい駐車場をめざして』（単著，一般財団法人つくば都市交通センター）